

「三田尻に於ける鷗外の写真」について——撮影場所は三田尻か——

安 川 里香子

キーワード 少年鷗外の写真 三田尻での撮影

要 旨

一九五四年、三田尻で、少年時代の鷗外森林太郎とその父

静男の写った集合写真が発見された。鷗外の長男於菟はこれを「父子が故郷津和野を後にして上京した折に、静男の実家吉次家のある三田尻で撮影したもの」とし、以来、これが定説になっていた。本稿は、その定説が誤りだったことを論証したものである。

野から上京の途中、三田尻（現、防府市）の吉次家に立ち寄った際に撮影したもの」と判断した。以来最近まで、これが定説となっていた。

鷗外が父静男と共に上京したのは明治五年、十一歳（満十歳）の時である。鷗外自筆「日記材料」に以下がある。

明治五年

十一歳。

六月二十六日石見国鹿足郡町田村の居を出で、父と東京に向かふ。

森鷗外記念会（東京都文京区千駄木）の数ある資料の中に、少年時代の鷗外森林太郎の写った一葉の集合写真がある。資料1がそれである。この写真は一九五四年、山口県防府市の、

鷗外父子上京の経緯について簡略に記しておこう。

鷗外の父森静男の実家、吉次家で発見されたもので、森家には伝わらず、また写真の裏面には年月日、撮影場所等の記載がなかった。鷗外の長男於菟氏はこれを、「鷗外父子が津和

森家は代々津和野藩主亀井家の典医の家柄であったが、天保十三年、秀庵の代に、何らかの事情で彼が周防山口へ出奔し、森家はいったん断絶した。数年後、漢方医佐々田綱浄が

森家に入り、家督を継いで森玄仙（のち、白仙）と名乗った。網浄は浪人者だったといわれる。網浄改め玄仙は木鳥家からキヨを妻に迎え、一女ミネが生まれる。このミネに吉次家から婿養子として迎えられたのが静泰（のち、静男）で、鵠外林太郎の父である。

静男は幕末、長崎や千葉県佐倉の順天堂で学んだ蘭医だったが、明治の廃藩置県によって藩医の職を失った。困窮した静男は、当時東京に移住していた旧藩主亀井茲監（これみ）を頼って上京、侍医になることができた。

この鵠外父子の上京については、啓蒙家西周が深く関与している、と中井義幸氏^①は述べている。

林太郎の曾祖父森周庵には三人の男子があった。長男は早世し、次男寛馬（周の父）は西家に養子となった。三男が出奔した秀庵である。西周は秀庵出奔後森家の当主となった玄仙（白仙）を「叔父」と呼び、本家たる森家再興のため尽力しようと図った。

中井氏は『鵠外留学始末』^②で次のように述べている。

徳川の世が終わった時、周が何よりも先に望んだのは、脱藩の罪を免ぜられ、老いた父を故郷に省すること

であった。明治二年暮れ、念願叶って、彼は四十歳にして十五年ぶりの帰郷を果たした。

森家を再興した白仙は既に亡く、一人娘ミネが女婿静男との間に設けた長男林太郎が七歳になって、この年藩校養老館に入学したところであった。

林太郎の類稀な才能を西が知ったのはこの時である。（中略）升子夫人との間に子のない西は、その年の三月、オランダ留学の友林紀の九歳の弟紳六郎を養子に迎えていたが、紳六郎は既に沼津兵学校小学部で洋学を学び始めていた。森家の嫡男林太郎を西家の嫡男紳六郎と並べて育てる構想は、この時西の心中に胚胎したのである。しかし、ミネは子供が幼いことを理由に西の申し出を辞退した。

沼津へ帰っていた西は、明治三年九月、維新政府の指導者山県有朋（やまがたありとも）に東京へ呼び出され、明治陸軍の建設に参与することになった。山県に厚く遇された彼は、四年八月、大輔山県、少輔川村純義（かわむらたみよよし）に次ぐ四人の兵部大丞（五年二月陸軍大丞と改称）の一人に任ぜられ、それを機に、上京当時住んだ浅草鳥越の借家から、水道橋に近い神田小川町広小路角の旧大名屋敷に移って、塾生・使用人・親類・友人等を大勢呼び集めて邸内に住まわせる大官生活を始めた。

同じ年、廃藩置県によって、津和野の森一家は窮地に立たされていた。静男は藩医の職を失い、林太郎は藩校養老館が廃校となつて、通つて学ぶ学校を失つた。一年を経過した五年八月、静男は東京に住む旧藩主亀井茲監かめいこれみに「侍医」として雇われ、林太郎を伴つて上京してきた。

そして、林太郎を西家に預け、その教育を西に委ねたのである。ここで西の方から林太郎の上京を促したことは、それを証すべき手紙等の資料は特にないが、当時の西が親類や友人を呼び集めて邸内に住ませていたことを考えれば、大いにありえよう。森家の嫡男林太郎と西家の嫡男神六郎を二人並べて育てる二年前の構想はここに実現したのである。

中井氏が指摘するように、西は本家森家の再興を自分の使命と考えていた。しかも幸いなことに、本家の長男林太郎は、幼い頃から故郷津和野で「神童」と評判の子であつた。西が、林太郎を手元に引き取り養育しようと慮つたことは大いに考えられよう。そのみか彼は後年、林太郎と赤松則義の長女登志子との結婚に深く関わり、——西に限つたことではないのだが——閥閥による一族繁栄をも謀つた。この林太郎と登志子との結婚に西が関与していた事実については、中井氏のリーダーの元、筆者他のメンバーで長年続けている「西周日

記翻刻の会」(あまね会)で初めて明らかにすることができた。林太郎と登志子の結婚は、不幸にして破綻し西の思惑は頓挫したが、この結婚についての経緯はあまね会編「西周日記 明治二二年」翻刻を参照していただきたい。

話を元に戻そう。いずれにしても、森父子は新時代に「一旗揚げる」べく上京を決意したのである。

冒頭に述べたように、記念会が所蔵する資料1の写真を、「森父子が上京の途次、三田尻で写したものと推定したのは林太郎の長男於菟氏であつた。」

ところで、この定説に、「はたしてこれは三田尻で撮影したものであろうか」と、最初に疑問を抱いたのが、中井義幸氏であつた。この当時、写真は未だ一般にはさほど普及しておらず、また非常に高額の出費を要するものだった。

「はたしてこの当時、山口の一地方都市にすぎない三田尻に、そんな写真館があつたのか?」という疑問が、氏の脳裏に浮かんだのかもしれない。

この疑問を解決するための手がかりとして、氏が注目したのは絨毯であつた。写真はどこかの写真室で撮影したものである。「この敷いてある絨毯で撮影場所を特定できないか?」

ここで、我が国での写真術の輸入と発展について多少の解説をするなら、日本で最初に写真館を開業したのは上野彦馬(1838-1904)である。長崎生まれの彦馬は、オランダの海軍医官ポンペによって長崎に開かれた医学伝習所に入門し、科学の研究を行う傍ら、渡来の写真技術をマスターし、文久二年(一八六二)、長崎中島川河畔に日本最初の営業写真館「上野写真局」を開業した。幕末の武士や町民のポートレート、長崎の風景や西南戦争の記録写真を数多く撮影した。中でも坂本龍馬像がよく知られている。

上野彦馬が拠点を長崎に構えたのに対して、同時期に横浜で開業したのが下岡蓮杖(1823-1914)であった。下岡は伊豆下田生まれ。江戸で絵師を志して狩野派に学んでいた頃、偶然ダゲレオタイプ^③を見る機会を得て、写真に開眼したという。下岡は幕末来日していた職業写真家ウンシンに写真術を学んだが、西洋科学の素養が乏しかったため、写真術の習得は困難を極めたという。上野彦馬が長崎で開業したのと同じ一八六二年、横浜で写真館を開業、明治以降は一八七六(明治九)年に、浅草公園にパノラマ館を開設し、多彩な活動をした。

林太郎と父静男の写ったこの集合写真の撮影が、もし三田尻ではないとすれば、考えられるのは東京か横浜辺である。

しかし下岡が浅草公園にパノラマ館を開設したのは明治九年、静男・林太郎父子が上京したのは明治五年であるから、浅草公園内の下岡写真館ではありえない。ここで考えられるのは、森家が後年まで鼻屑にして、たびたび記念写真を撮っていた「江崎写真館」である。

江崎写真館の創設者江崎礼二(初めは岩吉)資料2は、弘化二年(一八四五)、美濃国厚見郡江崎村(現岐阜市江崎町)の豪農塩谷家の新家で生まれた。江崎への改姓は「塩谷」の姓を読み換えられることが多かったため、後に出身地の江崎に改姓したという。

礼二の略歴は、『美濃のポトガラヒイ事始め』に従えば、おおよそ次のごとくである。

嘉永六年(一八五三)、浦賀沖にペリー率いる黒船が到来した。浦賀奉行戸田氏栄の要請で、大垣藩戸田十万石は急遽援兵を浦賀に送ったが、大垣のはずれ領家村にいた久世治作(のち喜弘)は、人夫頭として加わり、米国水兵たちから写真に関する初歩的知識を得た。やがて舎密学(化学)を修めた彼は、大垣藩砲術取調所の士分に取立立てられ、その傍らビードロ屋敷と呼ばれた自宅で、写真術の実験を行っていた。それを見て写真を志した江崎は、久世に写真の基礎を習い、明治三年、大垣藩

権大参事小野崎蔵男の従者となって江戸へ下った。

大垣藩江戸屋敷で働きながら、江崎は横浜で開業していた下岡連杖の門をたたき、約一ヵ月後の明治四年、独立して、横浜から東京市芝区宇田川町に居を移してそこで写場を開業した。しかし、当時は写真を撮ると魂を奪われるという迷信から営業不振であった。そこで彼は意を決して、外国船の火夫となって、アメリカへ行き更に写真術を極めようとしたが、周囲に諫められ浅草奥山のような盛り場での開業を勧められた。明治六年、浅草で地所を借りる際に寺社侍とちよつとしたもめ事があったが、地元の町火消しの元締め新門辰五郎の仲裁で無事開業できたという。以来、新門辰五郎は江崎家と親密な間柄になって、晩年は江崎写真館の名入り法被を着てよく写真館へ出入りをしたという。

江崎写真館が現存しており、しかも絨毯や背景の腰板といった手懸かりが掴めれば、林太郎父子の撮影場所を特定できる。

ここで非常に偶然な事であったが、筆者のかつての教え子（川村高等学校生徒）の中に、写真館江崎の子孫の姉妹がいたのである。幸いなことに彼女たちの父親信男氏が、東京都

渋谷区で江崎フォトスタジオを営業していることを知った。早速コンタクトをとって、中井義幸氏と共に、問題の写真を持参した。

事前におおよその事情を説明しておいたため、信男氏はご家族のものという古いアルバムを用意しておいってくださいました。

そしてその中に、あったのである、絨毯と腰板の一致する写真が。

資料3、**4**がそれである。

資料3は椅子に腰掛けた明治帝に、座して拝謁する形をとった江崎礼二。もちろん合成写真だが、絨毯と腰板を、**資料1**と比べてみよう。資料3、4ともに江崎家のアルバムにあるもので、いずれも江崎写真館内のスタジオで撮影されたものである。絨毯の四角い模様、長方形の枠で縁取られた腰板、江崎信男氏からはこの他にも数葉の写真の提供を受けたが、いずれも同じ絨毯、同じ腰板が写っている。絨毯、腰板といった高価なものがそうたびたび替えられるはずもないから、**資料1**は同じ場所での撮影と断定できるのは明らかである。

したがって、森於菟氏がこれを、「鷗外父子が津和野から上京の途中、三田尻（現、防府市）の吉次家に立ち寄った際

に撮影したもの」と判断して以来、最近まで信じられていた定説は誤りで、資料1は東京浅草の江崎写真館内のスタジオで撮影された写真であることが証明できた。

中井義幸氏はこの写真を、冬の服装から明治五年十月（太陽暦十一月）の、少年林太郎の西家人家記念撮影と断定し、『鵬外留学始末』の中で以下のように述べている。

写真の構成は少年林太郎（10）を中心としている。向かって左端のオールバックの男が、この年の東京のファッション「舶来の白襟巻き」を流行の型通りに結び、脇差しを差した護衛の従者を従えた陸軍大丞西周（43）で、右端にこれと対象をなす形で座る紳六郎（12）と二人で父子揃ってホストとして両脇を縁取っている。林太郎の右に彼を守るように抱く革靴に袴を履いた斬新な書生スタイルの青年は、西邸内育英塾の塾頭山辺丈夫（21）・西夫人升子の義甥・後の東洋紡績会社社長）で、少年の左に控えるのが父親静男（36）である。中央に立つ林太郎は、終生変わらぬその首の角度が当人であることが告げており、大名家の若君に似せたおかつぱ頭と、帯から下がる大きな守り袋とが、故郷に残った母の願いを語っている。

以上、少年林太郎とその父静男の写った集合写真が「三田尻」ではなく、「東京浅草の江崎写真館内のスタジオで撮影されたもの」であることを論述した。内容の多くは中井義幸氏『鵬外留学始末』に拠っているが、『鵬外留学始末』では断定の経緯については詳しく述べていない。本稿は筆者が江崎信男氏との橋渡しをし、中井氏と共に現場での確認に携わった者として、その経緯を述べたものである。

ちなみに、江崎礼二は早撮りの名人で、特に明治十五年十一月二十一日に隅田川で海軍省が行った日本で最初の水雷爆発実験の早撮り写真の成功は『写真集 明治の横浜・東京』他に残っており、また当時の新聞『郵便報知』他に掲載され、大変な評判になったという。

礼二の長男清によれば、
いよいよ水雷爆発となると、敷設されたのが川の上流より下流にかけて数マイルに渡っているので、第一第二と爆発したがその順序が一定しない。カメラを向けた方向で無く予想外の方向で爆発するから撮影が出来ない。次は何所で行われるかの予想がつかない。そこで山田真柳氏にたのんで、カメラの後に居てもらい三脚の雲台のねじをゆるめて置き、爆発と同時にその方向へカメラを回転すると、父がシャッターのバルブを握ると云う芸当

を演じて、漸くにして撮影した。それでも心配しながら現像してみると、その結果は満足する可きものであった。これが当時の読売新聞、絵入朝野新聞などへ掲載されて早撮写真の名声が一挙に知れ渡ったのであった。

（石黒敬章『続 幕末明治のおもしろ写真』）

礼二にはこの他にも月食の写真撮影にも成功して、世間をあっと言わせている。これについては東京天文台報第14巻第4冊に詳しいという。礼二の弟子はその後全国に広がり、地域の写真業界の振興に貢献した。また交友関係は政界では尾崎行雄・星亨・相撲の常陸山など多士濟々だったという。彼は晩年東京市の参事になったが、師の下岡蓮杖には終生敬意を失わず、晩年の蓮杖も杖についてはよく江崎家を訪れるのを楽しみにしていたという。またその息子清は肖像写真の芸術性を高めた先覚者で、尾崎行雄夫人テオドラや竹久夢二と子息の写真があり、また昭和天皇初め宮中の写真撮影にも従事した。礼二の五男三郎は写真教育の先駆者として東京写真師会会長を務めた。昭和二年、三郎は渋谷の宮益坂に渋谷店を開業している。信男氏は三郎の子息である。

（準教授 近現代日本文学）

原稿執筆に当たって、江崎信男氏からご懇切なお話と写真

の提供をいただいた。また岐阜県営業写真家協会からの資料も学ぶこと大であった。併せてお礼を申し上げます。

注

- ① 中井義幸氏：元東京芸術大学教授。森鷗外記念会常任理事。
- ② 『鷗外留学始末』：岩波書店、一九九九年
- ③ ダゲレオタイプ：ダゲールの発明した銀板写真法。水銀を用いて現像する。見る角度によってネガ・ポジが反転する特徴を持つ。

参考文献

- ・ 自記材料：『鷗外全集』第三十五巻、岩波書店、昭和五十年
- ・ 中井義幸『鷗外留学始末』岩波書店、一九九九年
- ・ 美濃のポトガラヒイ事始め展実行委員会編『美濃のポトガラヒイ事始め』岐阜県営業写真家協会、一九九〇年
- ・ 石黒敬章『続 幕末・明治のおもしろ写真』平凡社、一九九八年

資料1 左から西周、従者、森静男、林太郎、山辺丈夫、神六郎

森鷗外記念会所蔵

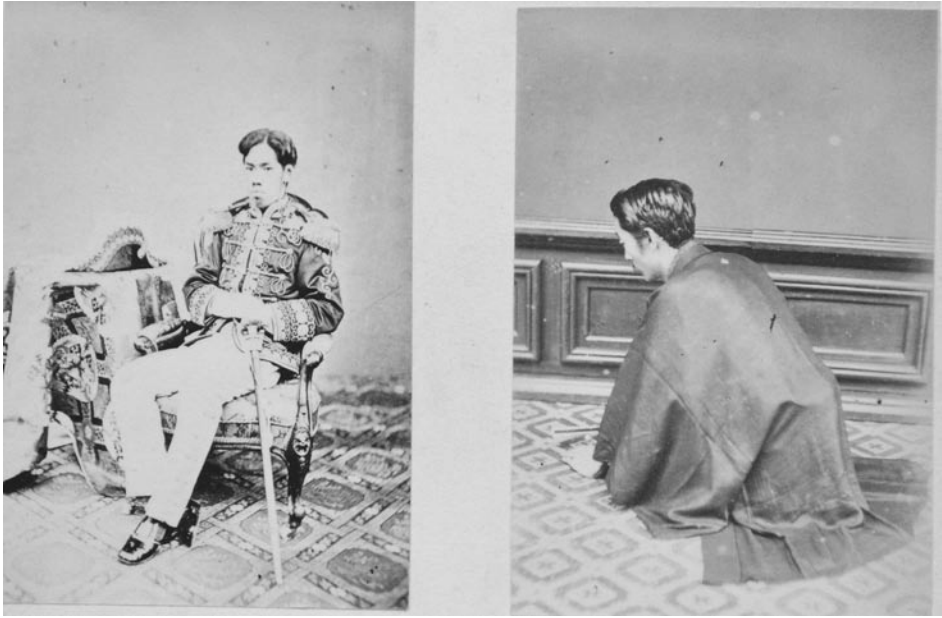


資料2 江崎礼二肖像写真（江崎信男氏所蔵）



「三田尻に於ける鷗外の写真」について

資料3 明治帝へ拝謁する構図の江崎礼二（合成写真）
（江崎信男氏所蔵）



資料4（江崎信男氏所蔵）

